

令和6年能登半島地震 日本赤十字社の主な活動

令和6年能登半島地震災害により、北陸地方の各地で甚大な被害が発生いたしました。
このたびの災害で被害に遭われた皆様に心よりお見舞い申し上げます。

日赤では、被災された方の命と健康を守るため、被災各地の被害の状況に合わせ、さまざまな支援活動に尽力しております。



©atsushi shibuya

救護所で**被災者の手当**を行う救護班



避難所で**巡回診療**を行う救護班



被災地に届ける**救援物資**を搬送する日赤職員



被災者の声に耳を傾ける**こころのケア班**



給水設備を使用する利用者



救護員**宿泊用のテント**を設営する日赤職員

**こうした活動が展開できますのも皆様のご支援の賜物です。
赤十字活動を支えてくださる皆様に心より御礼を申し上げます。**

令和6年能登半島地震 被災地からの声

皆様からの温かいご支援は、赤十字活動を通じて被災された方々にお届けしています。



寺田静江さん（82歳・七尾市）

「地震が起きたのは、お正月のおせちを食べ終えて、居間でくつろいでいたとき。立ってられない大きな揺れにびっくりしました。避難所ではトイレを流す水がないのでみんなで水くみに行きます。在宅避難している人も手伝ってくれて、みんな大変な中なのに人のやさしさが身に染みるというか、心温まります。うちの避難所はみんなで清潔に保っているから、きれいですよ。地域のつながりで頑張っています。日赤のお医者さんが避難所にきて診てくれたのは、心強く感じました。こうやって話を聞いてくれるのもうれしいんです！」



野木清さん（63歳・輪島市）

岡山赤十字病院救護班の診療を受けた野木さん。臀部にできた紛瘤（ふんりゅう）切開の痛みをこらえ、簡易ベッドの上でうつぶせのまま、見守る日赤の看護師に「人間って、弱いなあ」と言葉投げかけ…。

「避難所では食生活も糖質ばかりで偏るし、ストレスもある。それでも赤十字の外科の先生に処置してもらえたのは幸運でありがたかった。輪島朝市の火災で自宅も何もかもなくして落ち込んでいたけれど、もう一度ゼロから頑張るしかない、頑張ってみようと思えそうです」



輪島市のご夫妻

大阪赤十字病院救護班による診察を受け、安心した様子のご夫妻。

「11月に退院し、通院が必要なのに交通が遮断され、病院に行かれん状態です。不安な状態にあるもんで、診てもらえて、話もできて…」(夫)「何も持ってこれなかったのが、日赤さんから毛布をいただけて、すごくうれしいです。避難所の皆さん、喜んでと思いますよ、皆さん下に（日赤の毛布を）敷いてらっしゃるでしょう。これ一番最初にいただいて、助かってます」(妻)